フェンシングを知っていますか？　ヨーロッパで生まれたスポーツで、選手は片手にけんを持ち1対1で勝負します。昨年のパリオリンピック（五輪）で日本チームが合計5個のメダルをとる活躍をしたこともあり、小学生の習い事として人気が高まっています。札幌のこども記者が体験しました。

（中出幸恵）

フェンシング かけ引き楽しく

こども記者見ぶん録

攻撃と守り スピーディーに

畑光夏さん（新光小６年）と藤倉健さん（新琴似小５年）が訪れたのは、札幌市中央区の道新文化センター札幌教室。毎週土曜日、下野謹也さん(93)と娘の聖子さん(58)がフェンシング教室を開いています。謹也さんは、パリ五輪の女子団体種目で銅メダルに輝いた尾崎世梨選手＝札幌市出身＝を中学時代に教えたベテラン指導者です。

聖子さんが「早速着がえましょう」と声をかけました。フェンシングでは、ユニホームやメタルジャケット、プロテクター、グローブ、マスク、審判器につなぐ電気コードなど、身に着けるものがたくさんあります。金属でできたマスクは重さが約1キロあり、早速顔につけた2人は「重くて暑い」「見える範囲が狭い」と口にします。

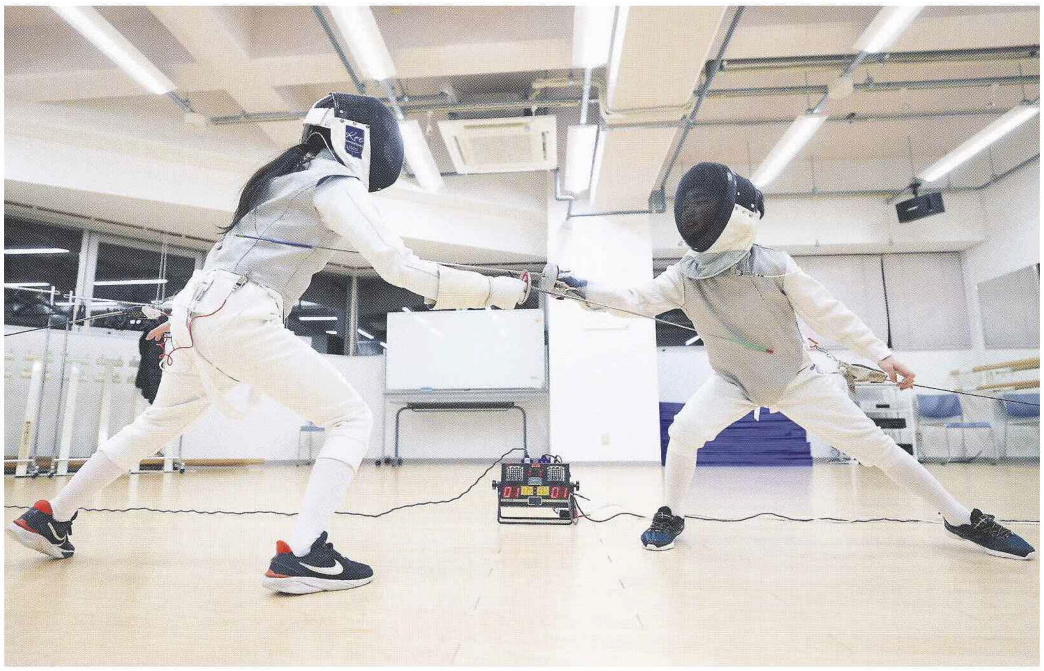
今回はフェンシング種目の一つ「フルーレ」に挑戦します。相手のどうやマスクのあご近くにある「たれ」をけんでつくと得点になります。攻撃と守りが入れかわるスピーディーな試合展開が見どころです。

まずは攻撃の練習です。けんは長さ約1メートル、重さ約500グラムで、よく曲がる鋼でできています。聖子さんの「うでをピーンとのばしましょう」の声に、畑さんは「けんが重くてうでがぷるぷるする」と必死です。

けんの先には小さなボタンがあります。500グラム以上の力がかかるとスイッチが入り、審判器に電流が流れて得点のランプが付きます。「しっかりつかないとダメなんだ」と藤倉さん。聖子さんは「その通り。うでと足をいっしょに前に出して勢いをつけましょう」とアドバイスしました。

簡単な技を学んだ2人は試合をしました。試合の合図はフランス語です。聖子さんが「エト ブ プレ（用意はいい？）」と聞くと、2人は「ウィ（はい）」と元気に答え、「アレ（始め）」の声で動き出します。2人はけんをはらったり相手よりも素早く動いたりして、熱戦をくり広げました。結果は1勝1敗の引き分け。マスクを取った2人は「楽しかった」と満足そうです。

聖子さんは「フェンシングは相手とのかけ引きを楽しむスポーツです。また挑戦してほしいです」と言うと、2人は笑顔で応えました。



（上）フェンシングの防具を身に着けて熱戦をくり広げた畑光夏さん（左）と藤倉健さん＝3月15日、札幌市中央区の道新文化センター札幌教室
（下）こども記者の2人は講師の下野聖子さん（右）からフェンシングのあいさつや礼儀を教わりました
（いずれも中本翔さつえい）

まなデジに動画

考えながらコツつかむ

畑　光夏さん
札幌市・新光小６年

フェンシングは「考えるスポーツ」と知り、体験中はそのことを意識しました。

最初は相手をけんでつく動きだけでしたが、試合をするうちに、技をどう使うか、いつ前にふみこむかなど考えるようになり、かけ引きの意味やコツをつかむことができました。

また、戦争のえいきょうで軽くて丈夫なウクライナ製のけんが手に入りにくくなっていると聞いて、胸が痛みました。

これまでフェンシングの試合をテレビで見たことはありましたが、体験を通じてたくさんの楽しみを見つけることができました。

防具の重さにびっくり

藤倉　健さん
札幌市・新琴似小５年

ぼくは、初めてフェンシングを体験しました。メタルジャケットを着るとすごく重く感じました。先生から1キロ以上あると教わり、おどろきました。

得点するには、けんを持つ手に力を入れて相手をつかなければなりません。力を入れ過ぎると相手がけがをしたり痛く感じたりするのではと少しこわくなり、慣れるまで難しかったです。でも、得点できたときはとてもうれしかったです。

2人の先生が優しく丁寧に教えてくれたおかげで、楽しく体験できました。機会があったらフェンシングをしてみたいです。